

ノン・イミニュニテイ

なりひらいちへいた
成平一平太

「主文、被告を死刑に処す」

地面を叩くかのように激しく降る雨の音が第二法廷の傍聴席からも微かに聞き取れる。

六月の空気は一年を通じてもつとも重い。その重い空気よりもさらに重い裁判長の声が殺人の罪に問われた斧寺広太の胸のつかえを降ろした。

広太は両親に二歳違いの兄と年子の妹とともに何かに不自由することもなく育てられた。一年ほど前に妹の里香子がアパート暮らしを始めたものの五人が顔を揃えると大きな笑い声は吐き出し窓を越えて道行く人の心までをも和ました。そして隣近所の誰もがそんな斧寺家を羨んでいた。

「どうしてあの広太君が・・・」

「なぜ、なにがあつたの？」

近所の誰もが耳を疑うかのような悲惨な事件が起つて丁度二年の月日が流れた。広太の父親、朝一ともかずは傍聴席の一番前に席をとり、広太の背中に詫びるかのような視線を投げかけながら裁判長が読み上げる判決文に

心を痛めた。

事件が起きた日、斧寺家の誰もが朝早くから浮足立っていた。広太が見初めた結婚相手の由美子が挨拶にやってくるからだ。朝一も佳子もこの日がくることを誰よりも願っていた。にもかかわらずこの日が斧寺家にとつて終幕の切っ掛けとなつた。惨事の火種は、広太が衝動的な行動を起こす一箇月前にあつた。いや、本当は朝一が佳子を見初めた時から始まつていたのかもしれない。

朝一は東京の大学を卒業し、大手ゼネコンに就職した。規律と体力とが重んじられた二週間ほどの研修を朝一は無事に終えることができた。総合職で採用された多くは、全国の支店や営業所への配属となつた。が、朝一は違つた。本社第一営業部に配属となり、サラリーマン人生において恵まれたスタートを切つた。入社試験での成績と研修中における機敏性とリーダーとしての素質を買われての配属だった。

競争心の旺盛な朝一は、上司にも恵まれ営業のイロハを徹底的に仕込まれた。朝一の吸収力の良さとバイタリティは、上司の好奇心をも掻き立てた。そしてその指導振りには厳しさに輪をかけるものがあつた。その

甲斐があつてか、国土交通省を始め各省庁はもとより関東圏における各官庁にも積極的に入入りできる度胸を朝一は磨くことができた。そしてその積極性をもつて各省庁とのパイプを作り上げることに関心を注いだ。特に将来における有望性のある若手の役人を見分ける力は群を抜いていた。そしてそれを営業業績へと結びつける手腕においては右に出るものはいなかった。業績の振るわないものや何かの不都合がおきればすぐに地方に飛ばされる。そんな社風の中にあつて朝一は、本営業部の本流から一度も外れることなく出世の階段を駆け上がった。

朝一は、入社七年目にしてだれよりも早く第一営業部の係長に抜擢された。同時に、国土交通省総務部の事務方であつた二十七歳の佳子と結婚をした。

佳子は、会津の高校を出ると公務員試験をトップの成績でパスし、国土交通省に事務方として採用となつた。高校の担任は佳子に大学への進学を勧めたが、女手一つでこれまで育ててくれた母親を楽にしてやりたいたの思いから就職への道を選択したのだつた。

佳子の戸籍の父親欄には何も書かれてはいなかった。その理由も、父親がどうしたのかも佳子は母に尋ねることにはなかつた。聞いてはいけないことだと自分に言

い聞かせてきた。母親譲りの人並み以上の容姿と成績がかえつて佳子を孤独にさせ、母子家庭のハンディを乗り切るには強い意思と意地が必要だつた。それは社会に出てからも何ら変わらなかつた。

キャリア組の何人かが佳子の容姿を見初め近寄つてはきたが、佳子の父親のことを知ると出世に影響するとはかりに遠ざかつていった。

そんな中にあつて朝一は、国土交通省を訪問するたびに佳子の存在を強く意識することとなつた。

「こんど一緒に食事でもしませんか？」

朝一は思い切つて佳子に声を掛けた。

「仕事から接待、接待で忙しいんじゃないやありません？」

佳子にも朝一の仕事振りが耳に届いていた。国家公務員という温室の中では外の世界との戦いは皆無に近い。社内における出世競争のためには他社との競争に勝ち抜くことが前提条件となるゼネコン。戦うための朝一の骨格は佳子の周りの男たちのそれとは歴然とした違いがあつた。

戸籍における父親欄が空白だつた佳子は、言い難い幾多の試験に耐えながらこれまでやってきた思いだつた。世間並みの結婚さえ望むには大きなハンディにもなりえる空欄。佳子が人並みの容姿ならば声を掛ける

男はいなかったのかもしれない。

半年ほどの交際を経て朝一と佳子は婚約をした。朝一の両親は佳子が片親で育ったことに難色を示したが、霞が関に勤めていることが幸いした。数年後には同居するとの条件つきではあったが無事に結婚式を挙げる事ができた。もともと佳子側に親族の出席はなく、役所の関係と数人の女友だちだけが新婦側の席を埋めた。斧寺家の長男でもある朝一側の招待客には多くの親族、仕事関係、友人らが招かれた。それでも佳子の母親は気後れすることなく朝一の両親に深々と頭を下げ、佳子の幸せを願った。朝一の両親は笑顔で挨拶を受けながらも、佳子の親族が招かれていないことを訝った。

新生活は葛西の小さな賃貸マンションで始まった。一人娘を無事に嫁に出した佳子の母は、独り静かに暮らしたいと会津を離れようとはしなかった。これまでも佳子は何度となく父親のことを母に尋ねようと喉元まででかかったものの何故かそのまま呑み込んでいた。不思議なことに佳子の節目、節目で地元の大物政治家の名前が耳元に残った。

佳子の母は小さな町工場の事務員として働いているが、佳子が産まれる以前は一流料亭の仲居をしていた

と母から聞いていた。事務員の給与は決して多くはない。小さな借家住まいの母子にお金の余裕などはない。頼れる親戚もない。それでも佳子が小学校に上がる時には、上物の赤いランドセルを背負うことができた。自分専用の勉強机など持っている同級生などはクラスの半分にも満たない。それでも佳子には立派すぎるほどの勉強机があてがわれた。中学校、高等学校と上がるたびに真新しい制服と鞆。高校生ともなれば靴も鞆も革でできていた。

何度も大臣を経験している大物政治家がお国入りをする度に佳子の母は仕事を休んだ。高校出の田舎者がいくら公務員試験の成績が良かったからといって霞が関の本省などに勤めることができるものなのだろうか。佳子にはなんとなくわかっていた。それでもそれを口にするとはなかった。口にすれば、きっと母が困るだろうと佳子なりに察しが付いたからだった。案の定、結婚式には祝電と共に大きな花束が届いた。

「それにしても大きな花束だったね。あんな大物とどんな付き合いがあるの？」

朝一の仕事には政治家の事務所への名刺配りも重要な位置づけになっていた。

「さあ？ お母さんが後援会の婦人部に入っているか

「らじやない」

佳子は話題の広がりを嫌って、適当にその場をごまかした。

結婚を機に朝一の仕事ぶりは多忙を極め、これまでよりもさらに充実したものになっていった。

「佳子、おれは必ずこの会社で這い上がってみせる」

「そおね。いつか私を重役夫人にしてね」

世間というところの甘い新婚生活など二人には無縁に近いものがあつた。佳子は物心が付いた時から常に独り取り残されることに馴れていた。朝一は、仕事絡みの接待が続き、夜の十時前に帰宅することなどない。休日は接待ゴルフの繰り返しとなつた。佳子も退職することなく、霞が関に通つた。二人が会話する時間は深夜か、朝食時のわずかな時間に限られる日々が続いた。それでも結婚をして二年後に身ごもつた。

「これで独りから開放される」佳子はなによりもこのことが嬉しかった。

佳子は、育児休暇を選択することなく国土交通省を退官した。朝一は相変わらず仕事浸けの毎日が続いた。

出産予定日を一箇月後に控え、佳子は里帰りをした。

朝一が独り、トースターに電源を入れ、フライパンに玉子を落としながら脇に置いた朝刊に目を移すと、あ

の大物政治家が倒れたとの記事が目についた。

翌朝刊には、治療の甲斐もなく他界したとあつた。脳梗塞だったらしい。葬儀は盛大に行われるだろう。

朝一は、早速に情報を集めた。葬儀には必ず多くの政治家や名だたる企業の代表者が焼香にやってくる。朝一の会社も社長自ら弔問することになった。しきびに花輪、弔電の手配も怠りはない。地元で密葬を行い、茶毘に付してから改めて東京で告別式を行うことになった。朝一は、会津に向かつた。

密葬とはいえ地元の名士。市長を始め多くの弔問客が寺の境内を歩き来した。

「お義母さん」

朝一は、影をひそめるかのように銀杏の大木の脇から本堂に飾られた遺影に手を合わせる佳子の母の背中に小さく声を掛けた。

「朝一さん」

佳子の母は朝一の姿に驚きを隠さなかつた。

「後援会の婦人部の皆さんはお手伝いで大変なので、は？」

「私はいいの。佳子のこともあるしこれで帰るわ。朝一さん、今夜は家にいらしてね」

その晩、朝一は久しぶりに佳子の大きなお腹に笑顔

をかさねた。

無事に出産を終えた佳子。初孫を愛しくあやす佳子の母。知らせを受けた朝一は、長男の誕生を喜び朝哉と名付けた。

産後の肥立ちも良く、二週間ほどで葛西のマンションに佳子は朝哉と共に戻った。知らせを受けた朝一の両親もマンションに駆けつけ、朝哉に頼ずりをくりかえした。

「朝一、朝哉も産まれ佳子さんも子育てになにかと手が掛かる。そろそろ、こちらに越してこないか」

結婚をするにあたっての約束事だった両親との同居の話が持ち出された。

「わかっている。佳子も承知している」

朝一は佳子次第だと思っただが、その時には口に出さなかった。

それから三箇月ほどして佳子の母に異変が起きた。脾臓に癌が見つかったとのことだった。発見が遅く、

すでにリンパにまで転移していることがわかった。独りしかりない身寄りの佳子に病院から連絡が入った。

医者の説明では余命三箇月とのことだった。佳子は母を説得し、直ぐさま東京の病院での治療に切り換えた。母に残されたわずかな時間。佳子は毎日のように母を

見舞った。

「佳子、あちらのお義母さんとうまくやるのよ。お姑さんの言うことは絶対だからね。朝一さん佳子をよろしくお願いします」

佳子の母の最後はあつかなかった。佳子は、慎ましくやかな葬儀を済ませ会津に葬った。

朝一の両親との同居は佳子にとつて最悪の状態の日々となった。朝哉の育児に時間のすべてを注ぐ中であつて、朝一は相変わらずなにごとにも仕事が優先された。結果として朝哉の育児は佳子が独り負うこととなった。ましてや佳子と姑との揉め事に朝一が関わることもなく、佳子は何かにつけて独りで解決して行くしかなかった。

「佳子さん、あなたは朝哉の育児のみしていればいいというわけではないのよ。斧寺家の嫁としてももう少しわきまえてくれなければ」

佳子には、義母の言っている意味がわからなかった。

朝哉をあやししながら戸惑う佳子に義母からの苦言はさらにつづいた。どうやら訪ねてきた親族への挨拶が嫁としてできていないと言っているらしい。

佳子に溜まるストレスは朝哉を溺愛することで紛らわされていた。そして時には夜遅く帰宅する朝一にも

愚痴をこぼすことがあった。ときには顔色を変えて朝一に救いを求めてくることもあった。朝一もその都度、聞き役に徹してはいるのだが、決まって佳子の話は支離滅裂といつても過言ではなかった。佳子のストレスはそのまま朝一のストレスとなった。休日になれば佳子と母との板挟みになることは目に見えていた。朝一は日曜日にも閑にわらず接待と称してゴルフバックを抱えて朝早く妻の佳子の見送りを背に受けながら家を出た。これまでも会社の休みの多くは接待と称して出掛ける事が多かった。大手ゼネコンの営業部長ともなれば国土交通省の役員だけに留まる事はなく、多くの政治家が接待の相手となった。ましてや取締役の椅子にもっとも近い本社営業のトップともなれば全国の市町村の役人、さらには地方議員までもが接待の対象となった。しかし、その日については接待などはなく朝一は家族のしがらみから逃げ出すためにゴルフバックを肩に担いだにすぎなかった。

「あなた、もう無理。気がおかしくなりそう。私はこの家をです」

帰宅した朝一を待ち構えていたかのように佳子は涙ながらに訴えた。佳子の話では、「朝哉との接し方が教育によくない。甘やかすだけでなく朝哉の心を育むよ

うに。いつまでも母乳をあたえていないで離乳食に切り換えなさい。そろそろ赤ちゃん言葉はやめなさい。それはだめ、これもだめ。斧寺の家を継ぐ子なのよ」と毎日のように干渉され、これ以上は耐えられないとのことだった。

その夜は、朝一がなんとか佳子をなだめ、事なきを得たが二人目の子供を佳子が宿すと、佳子はヒステリックになった。

「お義母さん、いい加減にしてください。朝哉は、誰よりも優秀な子です。聞き分けもいしお返事だって」
「そうですか、私はもう何も言いません。佳子さんのいいようにしてください」

二歳の誕生日を超えたばかりの朝哉に佳子は英才教育とばかりに幼児向け教材を買い込み、嫌がる朝哉を相手に口うるさく教え込んでいた。見かねた義母は、「まだ早いわよ。今は心を育むのが先よ。何にでも目を輝かせて興味を持つとうとしている時に強要はよくないわよ」と言っつては、朝哉を散歩に連れ出し、花や虫や犬、猫、鳥を指さしては朝哉に優しく語りかけていた。

それほどにそのの合わない義母ではあっても、出産時には手を借りなければならぬ。佳子は頭を下げて

朝哉を義母に預け、広太を産んだ。そしてその数箇月後に佳子は、三人目を身ごもっているにもかかわらず江戸川を越えてアパートを借りた。朝一も佳子に押されるままにこれに従うしかなかった。

さらに半年が過ぎて長女の里香子を佳子は出産した。この時も朝哉と広太は朝一の両親に預けるしか頼るあてはなかった。そして、その交渉はすべて朝一がすることになった。

「あなたは困った時だけ私たちを頼るのね」

「ごめん、かあさん。三週間だけ」

朝一は、懸命に頭を下げた。なにがあらうと朝哉と

広太が可愛い孫であることに違いはない。

「いいわよ。こまった時だけでなく時には顔を出すのよ」

三人の子供は佳子の愛を受けて何事もなく大きくなっていった。朝哉が小学校に上がって間もなく一軒家を構えることができた。転校は朝哉にストレスを与えると佳子が譲らず、アパートからほど近い所に新しい家は建てられた。朝一は前にも増して仕事に没頭し、子育てはあいかわらず佳子独りに任された。朝の食事時に家族が顔を合わすだけで朝一が帰宅するころには

すでに子供たちは寢息を立てていた。それは日曜日であっても変わりはない。毎日が母子家庭に近い環境での生活だった。家族が共に過ごすことができるのは夏の数日と正月三が日だけではあっても傍目には幸せな家族に見えた。

「あなた、朝哉は来年の春には中学に上がります。せめて小学生の間に家族旅行の想い出を作ってやれませんか？」

佳子は、冷えた夕食を温め直しながら朝一に懇願するかのような視線を投げた。

「わかった。なんとかする」

朝一は、夏休みをいつもより二日余分に取った。

「えっ、キャンプ？」

「どこに？」

「いつ？」

佳子から聞いた子供たちは目を輝かせはしゃぎ廻った。

奥多摩湖のほとりにテントを張るのは朝一と朝哉の役割になった。大きめの石を集めてのかまどは広太が作り、小枝集めは佳子と里香子が担当した。

立ち込める煙に涙を流しながら広太が奮闘する。じやがいもと人参に危なっかしい手つきで里香子が包丁

を入れる。飯盒の尻に薪の炎が頃よく当たるように気づかう朝哉。朝一はしきりにシャッター音を飛ばし、佳子は微笑みながら子供たちをじっと見守った。

芯の残る硬めの飯。不揃いなじゃがいもや人参がグツグツと音を立てる。これまでに味わったことがないほどに美味しいカレーを誰もが笑い声とともに腹一杯に堪能した。

朝一の家族にとつて唯一の楽しい想い出となった奥多摩湖畔のキャンプを境に、朝一は前よりも増して仕事に没頭した。朝哉が大学を卒業するころには朝一の名刺には第一営業部長と記されたその上に、執行取締役の肩書が付いた。あと数年もすれば取締役常務となるのは既成事実と思われていた。そんな矢先に斧寺家に異変がおきた。朝哉が社会の厳しさについてゆくことができずに、閉じ籠もり状態となったのだった。有名進学高校を難なくパスし、一流大学を優秀な成績で卒業し、大手商社に就職できたものの、一年あまりで辞めたいと言い出した。佳子は目を潤ませながら朝哉を説得したが朝哉は首を横に振るばかりだった。

朝哉の無断欠勤は一箇月あまり続いた。佳子は何が あったのかと朝哉の上司を訪ねた。

「お母さん、朝哉君は会社勤めに向いていないように思えます」

「そんなことはありません。朝哉は大学もトップクラスの成績で卒業しました。高校の同級生には医師や弁護士を目指している子も大勢います。あの子は誰よりも優秀な子です」

「お母さんが言われるように朝哉君は優秀なのかもしれませんが、我が社の仕事には向いていないように思えます」

「会社側の思い込みが朝哉を追い詰めているのでは？ まさかいじめがあると言うことはないですよね」

「お母さん、朝哉君は立派な大人です。まずは彼自身が出社して事情を説明するのが先決かと思えますが・・・」

押し問答が続いた。

「とにかくお母さん、朝哉君に明日は出社するように伝えてください」

明らかに上司の顔には苦渋の色が滲み出ていた。

その夜、佳子は朝一に朝哉が会社にもいかずに引きこもっていることを話した。朝一には何が起きているのかを理解できなかった。朝一が会社の上司の立場から問答無用で朝哉を切り捨てているに違いない。寝て

いる朝哉を無理やり起こし、朝一が問いたのだが支離滅裂で要領がえない。心が病んでいるようにも見える。生きるための競争をする必要もない学友や家族とは何ら差し支えることなくコミュニケーションが取れても社会に順応できていないかのよう朝一には見えた。

統合失調症、朝哉につけられた病名であった。医師の診断では、本人の気の持ちようでもあり家族がケアしするしかないとのことだった。精神安定剤とともにカウンセリングを時折受けることを勧められた。そのころ広太は厚木の大学へ、里香子は横浜の短大生だった。それぞれが自宅から通うのは面倒とばかりに下宿生活をしていたが朝一に言われ自宅通学が変わった。朝哉を常に家族が囲む生活をするので朝哉の心の改善を願った。広太も里香子も兄のためと電車通学に切り換えた。

「朝哉、あなたは私の子よ。誰よりも優秀なのよ。今は世の中が狂っているだけよ。必ず朝哉の力が必要とされる時がくるわ」

佳子は、自室にこもる朝哉に毎日のように語りかけたが、病状に改善の兆しは見られなかった。

広太も里香子も大学を卒業し、自宅から通える範囲

に就職をした。朝一もこのころには、仕事一辺倒から家庭に重きをおくようになっていた。と同時に本社営業部の本流から外され、通勤に二時間を要する支店勤務となった。

広太が大学を卒業して六年。

「どうして俺の周りはこちらもバカばかりなんだ？」

広太は職を変えるたびに口にした。

「広太、あなたが優秀すぎるのよ。今にあなたに見合う仕事が出てくるわよ」

そんな広太を佳子はいつも同調するかのよう擁護していた。しかし、里香子だけは違った。

「お母さん。お母さんはお兄ちゃんたちを庇いすぎよ。お兄ちゃんたちは弱すぎるのよ。お兄ちゃんたちよりも優秀な人は五万というわ」

「里香子」

佳子の顔色が変わると同時に大きな声が家の中に響いた。威圧するかのよう佳子の声などこれまでに聞いたことのない朝哉は部屋の隅に背中を丸め頭を抱え込んで怯えた。広太の顔も血の気が引いている。

「お母さん。私、近い内にアパートを見つけてこの家を出てゆくからね。ここにいたら私まで負け犬になりそうなの」

里香子は、意を決したかのように口にした。佳子の長兄を気づかつての提案から七年が過ぎた。朝哉の心の病は一向によくなる兆しをみせない。いや、ますます自室にこもることが多くなり、声はおろかか顔さえみない日が続いた。里香子にはこの家の空気が耐えられなくなっていた。この空気の色合いを創り出しているのは朝哉よりも佳子の存在が大きいと里香子は気づき始めていたのだ。里香子がアパートを探し始めて三週間が過ぎていた。あとは、口にする切っ掛けを待っていたにすぎなかった。

佳子の腕のなかで、三人の兄弟は草原を走り回るかのように育った。怪我をしそうな石や小枝は佳子が見つけるたびに取り払っていた。雨が降り出す前に大きな傘をあげ子供たちを抱えた。冷たい風が吹けば自らの背中で受け、子供たちだけは凍えないようにと立ちはだかった。佳子が子供のころから願っても叶わなかったことを朝哉にも広太にも里香子にも味合わせまいと常に子供に寄り添った。必死に母親役をやってきた自負が佳子にはあった。モンスタールペレンツと揶揄されることもあったが佳子は気にすることなく子供たちのことだけを考えてやってきた。里香子の振る舞いはそれらを全否定しているかのように佳子には聞こえた。

「里香子、あなたは親や兄弟を捨てるの？」

「だれもそんなことを言っていないわよ」

「朝哉は病気なのよ。家族が傍にいてやらないでだれが・・・」

「とにかく私はこの家を出て行くから。もうアパートだつて決めたし」

次の日曜日に里香子は家を出た。朝一は特に何かを口にすることなく黙って送り出した。

「あなた、なぜ里香子を止めてくれないんですか？これまで私は必死で子育てをしてきました。子供たちに寂しい思いをさせまいとあなたの分まで・・・。あの子は家族を捨てようとしているんですよ」

佳子は朝一を責めたてた。

「捨てるんじゃない。独り立ちしようとしているんだ」朝一には里香子がなぜこの家を出る気になったのかわかるような気がした。いや、この家を出て自立の道を選択することで一人前の女として成長できるような気がした。朝哉の今を創り出したのは朝一にも責任があると考えていた。佳子は、幼くして味わった寂しさをお供たちにはさせまいと必死にやってきたに違いはない。その結果がどうであろうと朝一にそれを責めることはできない。

里香子が家を出て半年が過ぎ、ひよっこり顔をみせにやってきた。

「どうだ、独り暮らしは？ 元気にやっているか？」
朝一には心なしか里香子が明るくなったような気がした。

「ええ、元気よ。朝兄は？」

「あいかわらずだ」

「そう。広兄は？ いまでも派遣？」

「ああ、安月給で不規則な勤務だ」

「今の仕事は幾つ目？」

里香子は小さく呟きながら指を折った。

「私の記憶にあるだけで六つ目。早く正職につかないと結婚もできないのにな」

「里香子はどうなんだ？」

「何が？」

「結婚だよ。彼氏はあるのか？ おまえだっていつ結婚したっておかしくない歳だ」

「そうね。男友達なら何人かは。それより今は仕事が楽しくて」

「そうか。けっこうなことだ」

他愛もない話を一時間ほどして里香子は帰って行っ

た。玄関先まで見送ろうと思ったのか、朝一は腰を上げ掛けたが思い止まった。

「生き生きとしているじゃないか、里香子」

一言も口を開こうとしなかった佳子に、「これで良かったんだ」と諭すように話しかけたが会話が続くことはなかった。佳子は未だに里香子を許してはいなかった。

里香子はその後も三箇月に一度は、ケーキやドーナツをもつては家族の様子を見に来るかののように顔を出すようになっていた。佳子も不機嫌そうな顔をしながらも里香子が持参するケーキを口に運んだ。その様子を見ながら里香子はいつも小さく笑っていた。

「お父さんは？」

「お昼ごはんを食べて、図書館へでかけたわ」

「それより里香子、独り暮らしで家事はきちんとできているの？」

「どうやら佳子は、里香子に悪い虫がつきはしまいかと心配しているようであった。

「料理に掃除、洗濯どれもちゃんとやっているわよ」

「そう、ならいいのだけれど……。広太が結婚した人ができたって」

「えっ、広兄が結婚？ うっそう」

「嘘って言い方はないでしょ。広太だって三十になるのよ」

「で、どんなひと？」

「どんなって、お母さんもまだ会っていないの。来週の日曜日に連れてくるって」

「でも広兄、仕事は？」

「今は、A通販で電話の窓口担当らしいわ」

「それって、正規雇用？」

「派遣社員として採用されてまだ一年。正規の道もあるらしいわよ」

「あいかわらず続かないわね。そんなんじゃないの？」
「でも生活が成り立たないんじゃないの？」

「もちろん、共働きよ。それに相手は大学を出てからM薬品に勤めてるらしいわ。大学のサークルが一緒だったらしいの。偶然渋谷の交差点で会って半年ぐらいお付き合いをしていたらしいわ。そして一箇月前にプロポーズしたんだって」

「M薬品って一部上場よ、学卒で八年だと五百万くらいの年収はあるわね」

「そうなの？」

「むりむり、とても信じられない。その人よっぽど結婚に焦っているのね」

「なんてことを。広太は優秀な子よ。お給料が良くらいなんだっていうの。広太と結婚できるのよ」

「まあ、結婚は本人同士がよければ……。で、式はいつごろ？」

「それもこんどお見えになったら大体のところは決めないかね」

「ねえ、私もその人に会ってみたいから参加してもいい？」

「もちろんよ。家族なんだから。でも、参加って言い方はよしなさい」

「元氣そうだな」

朝一が、何冊かの本を抱えて帰ってきた。

「元氣よ。それより今、母さんから広兄のこと聞いたわ」

「そうか」

「広兄もついにこの家を出て独立か・・・」

「なにを言っているの。広太は結婚してもこの家にいるわよ。広太にはプロポーズの相談を受けたときに話してあるわ」

「むりむり、相手がうんとはいわないわ」

里香子には確信があった。佳子とうまを合わせることができる人などいるはずがない。ましてや問題を抱

えた朝哉の存在も障害になると里香子は付け加えた。

「そんなことはないわよ。広太はそのつもりよ」

「相手の人には同居の話がしてあるの？」

「広太には、相手に言う必要はないと言っておいたわ。嫁にくるのよ」

里香子には佳子の口ぶりが、嫁ならば斧寺の家に黙って従えばいいと言わんばかりに思えた。

「なにも同居などする必要はない。歳を重ねて同居したいと言えばそれはそれでいい」

朝一にも広太の相手が同居を承諾するはずがないと思えた。

「ありえない。絶対にありえない」

里香子は重ねて口にした。

「あなたたち、家には朝哉がいるのよ。この先のことを考えたら同居してもらおうしかないのよ」

「朝哉のことは親のおれたちが責任を持つことであつて広太に押しつけることじゃない」

「押しつけるって、そんな言い方は……。広太とは兄弟なのよ。弟が病気の兄を思いやってやらなければ……。嫁は黙って従うものよ」

「とにかく、朝哉はおれたちが元気なうちはともかく改善する様子が診られなければ施設か病院に入れる。」

この家を売ってでもその費用は工面するしかない」

「そんなことはできません。世間体だつて……。」

佳子は「子育ては私が独りでしてきたのよ。あなたには何もわかつていないのよ」と、喉元まで出掛けたがそのまま飲み込み押し黙った。

「子供たちはもう大人だ。広太も里香子もそれぞれの人生を歩めばいい。なにもこの家に縛ることはない」

朝一は、「おまえだつて同居を嫌つたじゃないか」と言い掛けたが、無理やり呑み込み佳子に諭すように口にした。が、佳子の顔は不満げだった。

日曜日の午後になつて広太は滝本由美子を伴つて斧寺家の門を開けた。佳子は今朝早くから庭先はもろろん、玄関ドアから土間、応接間、台所と念入りに磨き上げた。今日を境に姑として嫁に見せつけておく意地があつた。

応接間のソファアに広太と由美子が並んで座つた。向き合うように朝一と佳子、そして里香子が座つた。

朝哉はあいかわらず二階の自室にこもつたままだつた。応接間の由美子以外の誰もが、朝哉が奇声を発するこゝとだけはないようにと願つていた。

「綺麗な顔立ちのお嬢さんね。それに芯もすっかりと
していらつしやる。広太にはもつたないくらいなお

嫁さんね」

広太が由美子を紹介し、由美子が挨拶を終えると同時にだれよりも真つ先に佳子が由美子の容姿を誉め称えた。もつとも佳子の目は広太を見据え、「気の強そうな顔立ちだこと。意地っ張りにも見えるわ。広太、この人に負けてはだめよ」と、声に出すことなく投げかけた。もつとも広太に伝わるはずもない佳子の呟きではあったが、由美子はこれを捕らえていた。由美子は気付かない振りをして、広太と出掛けた幾つかの想い出話をした。他愛もない話で応接間には時々笑い声が広がった。

「それで由美子さん、お式はいつごろのつもりをしているの？ あなたたちのお部屋は西側の八畳間と思っているから・・・その前にリフォームをしなければ」
佳子は、由美子の顔色を伺いながらさりげなく、同居の話の切り出した。

「えっ。リフォーム？」

由美子は、佳子が口にしたリフォームの意味が理解できなかったが、口元の筋肉を緩めることでかろうじて笑顔を保った。もつともその緩めた筋肉も一、二秒で傍目にはわからない程度にけいれんを起こした。

「由美子さん。俺の給料では生活が大変だし、兄貴の

こともあるからこの家にお嫁さんに来てもらいたいんだ」

由美子の戸惑っている様子に広太は、二人の新しい生活の場をこの家で始めたいと告げた。朝一と里香子は何かを口にするでもなく三人の様子を伺っていた。

「広太君、ご両親と同居するってこと？ それにお兄さんってどういうこと？」

由美子の問いかけは優しく語りかけるかのように見えたが、頬紅の下の地肌の色合いが変化しているのを里香子は察知していた。

「おれは今、派遣だから給料が安い。それに兄貴が病気だから」

「大丈夫よ、由美子さん。広太は優秀な子だからいつでも派遣遣ってことはないわ。朝哉だって手がかかるわけじゃないし。それより広太、由美子さんのご両親へのご挨拶を早くしないと。私たちとの顔合わせの日取りも決めなくては。ねえ、由美子さん」

「ちよつとまってください。あまり性急にお話が進んでも・・・まずは両親に広太君を紹介しなくては。父や母がなんて言うかもありますし・・・」

「大丈夫よ。結婚は当人同士が決めることよ。それに広太ならきっと由美子さんのご両親にも気に入って

ただけるわ」

由美子が言いたいことは結婚そのものではなく、広太が正規雇用ではないことと同居についてだった。それに加え、病気の朝哉までもが一つ屋根の下で暮らすことに由美子の両親が賛同するはずもないことは容易に察しがついた。由美子は女姉妹の長女だった。

由美子の両親は、二人の娘のどちらも養子を取ることなく嫁に出すと日頃から口にしていた。由美子には両親の思いは痛いほど理解できていた。三十という年齢になるまでには幾つかの結婚の話が由美子の前を通り過ぎていった。両親のことを考えるとなかなか結婚に踏み切ることができなかった。次男の広太。大手通販のA社に勤めていれば生活の安定は約束されている。三十歳になった由美子にはあせりがあったのかもしれない。

「うわー、いい匂い。だあれこの女の人の？」

朝哉が応接間のドアを開けて入って来るや、由美子の顔を除きこむかのように顔中の筋肉を緩め鼻を近づけてきた。由美子は咄嗟に手で朝哉の顔を払いのけようとしたが体をのけぞらすことで必死にそれを耐えた。「朝哉、こちらは由美子さん。広太のお嫁さんになる

人」

「お嫁さん？ 広太、お嫁さんをもらうの？」

「そうよ。今、大事なお話をしているから朝哉は自分のお部屋にいつてらっしゃい」

「お嫁さん、お嫁さん。広太が綺麗なお嫁さんをもらう。お嫁さん、いいな、いい匂いのお嫁さん、いいな」

朝哉は手をたたき、スキップしながらはしゃぎ廻った。幼い子供なら微笑ましく由美子にも映ったにちがいない。しかし朝哉は三十を過ぎた大人である。W大を卒業していると広太から由美子は聞いていた。その朝哉が目の前で奇怪な動きをしながら騒いでいる。

「朝哉、さあ二階に行くわよ」

さすがに佳子もままずいと思っただのかソファから立ち上がると朝哉の手を引いて応接間を出ていった。

「由美子さん、驚いた。朝兄は大学をでて一年ほどお勤めをしたのだけれど突然見た通り幼児帰りましたみたい。お医者様は統合失調症だって」

里香子が戸惑いをみせる由美子に斧寺家の事情を説明するかのように口にした。

「由美子さん。私は同居などする必要はないと考えている。どこかに部屋を借りて広太と新しい生活をすればいい。ご両親とも良く相談をさせていただいた上で、広太と一緒にこれからのことは決めていけばいい。今

日のことは少し驚いたかもしれないが、私としては良
い人と広太は巡り逢ったと思う」

朝一の一言で、由美子は救われた思いだった。この
ままの状態では腰を上げようにもそのタイミグが図
れなかった。由美子がソファアから立ち上がるとつら
れたようにそれぞれが腰を上げた。

「あら、もうお帰りなの？ お夕飯でも思っていた
のに」

朝哉を部屋に戻し、帰ってきた佳子のがっかりした
様子を滲ませた。

「お母様、今日はありがとうございました。あまり帰
りが遅くなると・・・両親も今日の報告を心待ちし
ているでしょうから」

「そうね。じゃあ、また近いうちにいらしてね」

「母さん、おれ駅まで彼女を送ってくるから」

二人を玄関先まで佳子と朝一が見送った。応接間に
残った里香子は、手をつけずに残っていた佳子のシ
ョトケーキを口に運んでいた。

「気の強そうなお嬢さんだったわね。でもまあうまく
やっつけていけるわ」

二人の見送りから戻った佳子が、テーブルの上に残
されたティカップを片付けながら呟いた。

「お父さんは？」

佳子ひとりが応接間に戻ってきたことを里香子は不
思議に思った。

「コンビニで週刊誌を買って来るって」

「そう。今頃、由美子さんと広兄は喧嘩しているわね」

「どういうことよ」

「この結婚は白紙になったということよ」

「どうしてよ。そりゃあ少しは朝哉には驚いたかもし
れないけれどたいしたことじゃあないわよ」

「そうかな、私だったら絶対にごめんだわ。派遣社員
に姑との同居。おまけに精神病の兄貴つきよ」

「なんてことを言うのよ。朝哉は精神病なんかじゃな
いわよ」

里香子の予想通り、斧寺家での出来事に憤慨して小
走りの由美子を広太が追いかけるように歩いていった。

「ちよつと待ってよ。なにを怒ってるの？」

駅前のロータリーへと続く歩道橋を登り切ったとこ
ろで広太は由美子の肩を捕らえ正面に回り込んだ。

「なにをって。広太君、この結婚は御破算よ」

由美子は広太の手を払いのけ、堪えきれない怒りを
広太にぶつけた。

「どういうことだよ」

「どういうって、だいたい広太君が派遣だったなんて聞いていないわ。派遣のお給料なんかでどうやって生活するのよ」

「だから、親と同居すれば家賃たつていらなしいし・・・」
「同居だなんてとんでもない。絶対にいやよ。そのうえ病気のお兄さん付きだなんてとんでもない」

「じゃあ、どうすればいいんだよ」

「どうもしないわよ。広太君との結婚をやめれば済むわ。婚約解消ね」

「いまさら冗談いわないですよ。母にどう説明すればいいのさ」

「お母さん？ 広太君はマザコン？ お義母さんも子離れしていないわね」

「母の悪口はよせ」

「お義母さんのことになる」とむきになるのね。まさにマザコンね。最初から同居だと決めつけている」

「しょうがないだろ、朝兄のことだつてあるし」

「私は稼ぎのいい家政婦なの？ まったく冗談じゃない。精神病のお兄さんの面倒なんて何で私が。だいたい優秀なら三十にもなつて派遣つてことはないわよ。お兄さんだけじゃなくお義母さんも頭がおかしいんじゃない？」

「母のことを悪く言うのはよせつて言っているだろ」

「綺麗な顔立ちで芯もしつかりですつて。強情そうな女つて言っているように聞こえたわ。なにが近いうちにまたいらしてよね、よ。二度とお義母さんと会うことはないわよ」

「よせ、それ以上口にするな」

かろうじて保たれていた精神的な均衡が崩れたその瞬間、広太は由美子を力任せに突き飛ばした。由美子の体は宙を舞うように歩道橋の階段の踊り場に落ちてから歩道まで転がった。広太は直ぐさま階段を駆け降りて由美子を抱き起こそうとした。が、すでに息をしないように思えた。広太の顔は青ざめ心臓は高鳴り足が震えた。ことの重大性におののき、何をどうすればいいのかわからなかった。広太は由美子を放置し、遠巻きに見ていた数人の通行人を払いのけ一目散に逃げ帰った。

「どうしたの？ 広太。顔が真っさおじやない」

佳子は、勢い良く応接間に飛び込んできた広太の様子に驚いた。

「やつぱり。由美子さんに婚約を破棄されたんでしょ。そらそうよ、由美子さんは上場企業のOLよ。派遣に同居、さらに精神病の朝兄付きじゃ誰だつて・・・」

由美子さんにしてみれば結婚詐欺にあったみたいなのよ」

「うるさい。黙れ」

広太は、今日という日のために佳子が活けた花を驚掴みにして里香子の顔に投げつけた。

「なにをするのよ。本当のことじゃない。もつと自分に釣り合った人を相手にしない広兄が悪いのよ。お母さんに優秀なんて言われて鵜呑みしてるからよ。だいたい社会に対する免疫がないのよ。朝兄も広兄も」

「うるさい、うるさい、うるさい」

広太は花の抜かれた花瓶を振り上げて里香子の額を割るかのよう振り降ろした。広太の手にしていた花瓶は原型を崩して足元に落ちた。里香子は倒れこみ、痛みを押さえるかのように頭をかかえこんだ。指の隙間からは熱い液体が漏れだしている。

「広太、なんてことを」

倒れこんだ里香子に佳子は駆け寄った。

「里香子、大丈夫。しっかりしなさい」

「もうどうなったっていいんだ。由美子を歩道橋から突き落として死なせてしまった。俺は殺人者なんだ」

「どういうこと、なにがあったの？ 殺人者ってなに」

佳子は目の前に起きていることと、歩道橋での出来

事を結びつけ、取り乱すかのように広太の両肩に手を掛け激しく揺すった。

「うるさい。みんな母さんのせいだ」

広太は佳子を力任せに振り払った。佳子の体は赤く染まった絨毯に倒れこんだ。広太は、応接間を出ると玄關脇に置いてある朝一のゴルフバックからドライバを抜き取り、ヘッドカバーを投げ捨てながら再び応接間に戻った。

「俺は、ちつとも優秀なんかじゃないんだ。そんなこと子供の時からわかっていたんだ。だけど母さんが、母さんが・・・」

鈍い音とともに鮮血が飛び散り、広太の体と応接間の壁を赤く染めた。再び佳子は絨毯に倒れ込み、頭から溢れだす分厚い血が広太の足元からんだ。里香子は微かな意識のなかで、鬼畜と化した広太の姿を捕らえた。おぼろげな光景ではあったが何が起きているのかは理解できた。必死に逃れようとする思いとは裏腹に動かない体。応接間に何度も放たれる鈍い音の根源が里香子にも振り降ろされた。すでに里香子にはうめき声さえ発するだけの力は残っていないかった。

「広太のお嫁さん、もう一度みたいいな」

朝哉が応接間に入ってきた。

「わお、綺麗。真つ赤な蝶々が壁に一杯とまっている。広太の顔にも・・・。あつ、あつちにも」

朝哉には応接間に広がっている衝撃的な出来事を理解することができなかった。定まることのない焦点が飛び散った鮮血を捕らえ、自分の世界に陶醉している。「お母さんも里香子もそんなところで寝ていたらだめだよ」

朝哉は倒れている佳子の傍に膝まつき背中を揺すつた。新たに鈍い音が放たれた。これまでの幾つかの音よりも幾分大きな音にも思えた。

「広太。おまえ」

真つ赤に染まつた応接間にコンビニから帰った朝一の受けた衝撃がそのまま声となって響いた。広太が手にしているドライバーは朝一にも向けられた。

「やめないか。落ち着け、広太」

朝一は週刊誌を丸め応戦の構えをみせたが振り降ろされたドライバーは、頭こそ逃しはしたものの朝一の鎖骨を砕いた。広太はもう一撃とばかりにドライバーを振り上げたところを、駆けつけた数人の男たちによって背後から取り押さえられた。歩道橋での出来事の通報を受けた所轄警察が、目撃証言から斧寺家に駆け込んできたのだった。

由美子は歩道橋の階段から転げ落ちた際に後頭部を強打し、病院に搬送されたが緊急治療の甲斐もなく、日付が変わろうという時刻に息を引き取った。佳子、里香子、朝哉はいずれも脳挫傷で即死だった。朝一は鎖骨骨折で二箇月の重傷となった。

広太は現行犯逮捕され、取り調べを受けたあと検察庁へと送られた。新聞や週刊誌は猟奇な殺人事件として大きく取り上げた。そして、過保護な親に育てられたことによる社会生活に対する免疫の欠如の結果と報じる週刊誌もあった。

「被疑者はイミニティ不足により、つまりノン・イミニティ。アンチボデイが形成されることなく大人になってしまったことの結果とも言える」

無責任な評論家がわかつたように補足した。

広太は精神鑑定を受け、入念な取り調べのあと一審で死刑判決を受けた。死刑制度反対の人権派弁護士によって上告されたものやはり控訴審でも死刑判決がくだされた。

「斧寺君。君のしでかしたことは裁かれなければならぬ。しかし、現代社会において死刑制度は間違っている」

「弁護士、僕は判決を受け入れようと思っっています」

刑が確定し、広太は収監された。朝一は病院を退院するとその日のうちに佳子と子供たちを弔った。翌日には、古く小さなアパートにわざわざかなりの荷物とともに住まいを移した。さらにその翌日、入院中に段取りを済ませておいた全ての資産を現金に変え、それを持って由美子の両親に詫びた。

朝一は佳子たちの月命日には墓地に足を運び、広太に手紙を書いた。そして三箇月に一度は東京拘置所に広太を訪ね、他愛もない話に笑った。朝一には子供たちとの幼いころの思い出となるような話はそれほど多くはない。決まって奥多摩湖のキャンプの話題が中心となった。

「父さん。おれ、向こうに行ったら必ず由美子さんや母さんたちに謝るからね。許してはもらえないかもしれないけれど必ず謝るからね」

「そうだな。じゃあ、また来るからな」

二十分あまりの面会の最後は必ず広太が涙ぐんだ。

それから八年、朝一のもとに広太の刑が執行されたとの知らせが届いた。朝一は遺骨を引き取ると弔いを済ませ、佳子たちが眠る墓地に広太を埋葬した。

広太の四十九日をすませた朝一はアパートを引き払った。その翌日、新聞の片隅に奥多摩湖で老人の溺死

体が上がったと小さく報じられた。

完